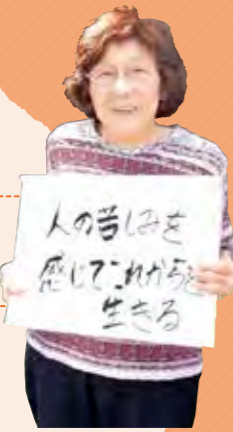


穂山 愛子さん  
(北栄町、80代)

自宅で被災。農作業場、  
車庫等に大きな被害を受けた

### 人とのつながり

余震で建物がまただんだん傾いたんですわ。それで自治会長さんに「しんちゃん、大変だよー、昨日より傾いとるー」って言って。そしたら「大変か？。すぐに何とかせないけん！」って言って、電話してくれてねえ。それで業者さん連れてきてくれた。柱持って来てくれて、すぐにね。



穂山 敬仁さん  
(北栄町、60代、農業)

自宅、作業場の倒壊等  
大きな被害を受けた

### 仲間の助けで片付け

連れなんかが来てくれてねえ。毎日交代交代で。結構大きい家だけんねえ。この部落の同じくらいの歳の人とか、年配の人とか、若い子とかね。40歳前の人も手伝いにきてくれたし、70歳くらいの人とか、年齢はまちまちでしたね。15人くらい来てくれたかなあ。有り難いことだわね。ほんにほんに。

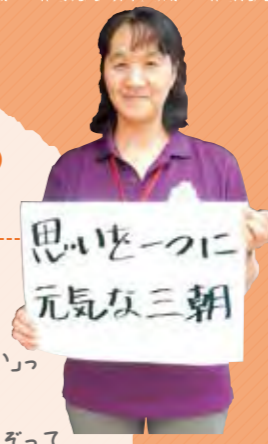


小椋 まみさん  
(三朝町、50代、商工会事務長)

震災後、地域活性化のための  
様々なイベントなどを実施

### 温泉街の温泉施設を無料で開放

でも、「このままじゃいけん」って。「ああ、何かしたい」っていうか、「何か動けんかな」っていう思いわね。1人じゃできないけど、まとまって何かできるぞっていう気持ちがある。このことが一番だったかなあと思いますね。そう、そこに繋げていけたっていうのがね。「かたち」にする仲間、「かたち」にする組織、そういうのがないと、思いだけで終わっちゃうんでしょね。



牧田 智子さん  
(倉吉市、自営業)

国登録有形文化財の銭湯を経営  
浴室壁面のタイルが大量にはがれ落ちた

### 恩返しせないけん

なんかかんとか、皆さんに助けてもらって復興できたです。とりあえず。地域の皆さんもそうだけど、行政がな。すごかったよ。はようちに動いてくれたね。うちなんか1カ月だけで再開できたもん。そやから、恩返しせないけんと思ってるわ。

野口智恵子さん  
(湯梨浜町、50代、自営業)

地震直後に近隣をまわり、  
避難誘導

### 小さなコミュニティの絆

独居の方、高齢の方、あの方は大丈夫かな？あの方はどうか？とか、この時間はご家族はお家にいるのかな？とか、自然にそういうことを頭に浮かべながら避難した。地域のつながりというか、助け合いというか。そうそう。そういう、日頃からのつながりがあってね。今は、防災マップ、その前に「支え愛マップ」を作ることを考えています。区長さんのシールと、区長さんの次に動ける人のシール、あと、声かけが必要な方のシール、危険個所のシール、という感じで、大きさと色を分けて、シンプルな形で、自分たちが作りやすい、進めやすい形でやっていこうって。



加藤 貴子さん(10代、高校生)  
白山 芽依さん(10代、高校生)

ボランティア活動に  
参加した地元の学生

### 自分たちにできるボランティア

お母さんにも外に行かんほうがいって、家におるほうが安全だけんって言われたんですけど、友達ボランティアの誘いもあったし、自分たちが割と被害がでなかったけえ、余計ボランティアしたいって思ったかもしれんですわ。やってみたら喜んでもらえて、ちょっとは相手にとって何か役に立てたのかになって思えたのは嬉しかったです。

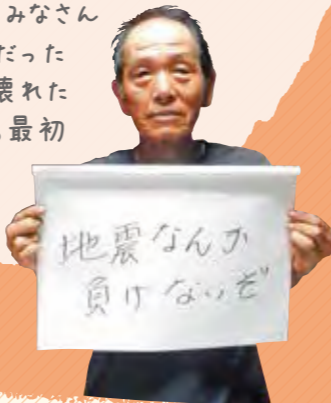


清水 進一さん  
(北栄町、60代、自治会長)

倒壊した建物による道路の封鎖など、  
比較的大きな被害を受けた地区の自治会長

### 集落を巡回して安否確認

現状を見るのに自転車ですーと部落内をまわりましたね。何軒ぐらいだったかな？ そうだね、だいたい180軒あったかな。まわると言ってもなかなかまわれないと思うでしょ？まあでもね、家が込み合ってますから、そんなに時間がかかるもんでもないね。ゆっくりゆっくりみなさんの顔を見ながら「大丈夫だったか？」とか「大変だなあ、壊れたなあ」なんて言いながら。最初の2時間ぐらいかな。

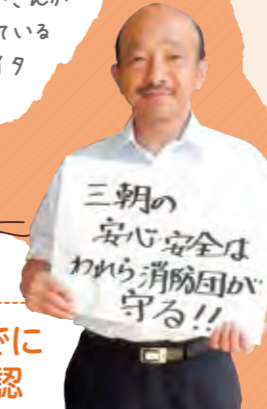


杉中 惇平さん  
(倉吉市、20代、地域おこし協力隊)

地域おこし協力隊として  
大阪から倉吉に移住して被災

### 助け合いの文化が根付いた町

地震の直後、道路にガラスや瓦が散らばっており被害の大きさを感じました。一方、町のいたるところで近隣住民が、テントを持ち寄り仮設の避難所を作ったり、余震が続く中にもかかわらず、おじいさんがはしごで屋根の上にブルーシートを張っているのを目の当たりにして、「この町のバイタリティはすごい！」と思いました。



米原 諒一さん  
(三朝町、50代、消防団長)

被災当日の夕方までに  
住民全員の安否を確認

### 地域の安全を守る

三朝の場合は、消防の班っていうのがね、各集落ごとにだいたい作られてあって、それで、だいたいの集落に消防の班があるという、地域密着型の消防団なんです。だから、上からの命令がずと下に流れていって、それぞれが、それぞれの持ち場をしっかりと集約していくという形になっています。

八渡 和仁さん  
(倉吉市、50代、障がい者施設施設長)

被災した障がい者や  
職員の安否確認などに奔走

### 地域のつながり

避難しているときは近所の人も出てきて、同じところに避難されたりしていたので「大丈夫ですか？」みたいなのがありました。そこで立ち止まっている人に「よろしくお願ひします」って言ったり、気にはかけてくれてましたね。

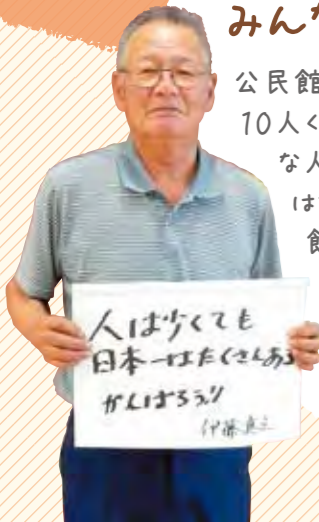


伊藤 真之さん  
(湯梨浜町、70代、区長)

地震直後に  
自主避難所を立ち上げて活動

### みんなが主役！地域の底力

公民館には15、6人かな、集まったよ。で手伝いに10人くらい来てくれたね。避難している人だった元氣な人はおるから、握り飯炊いたり、お茶出したりはできるわね。そのあと町の方から握り飯や飲み水それから毛布の支援があったけど、それより先に握り飯作って配ってたね。誰かバリエーダーシップを取って呼びかけた、とかそういうのじゃなくて自然発生だね。



「わたしたちの チカラ・キズナ」

